

## アセクシュアルに関する精神分析的理解について

鈴木 菜実子

### (要約)

近年、認知されるようになったアセクシュアル／アセクシュアリティという性的なアイデンティティは、その定義である「性的な惹かれの欠如」、あるいは「性的魅力や性行為を重視しない」というあり方からいっけん、精神分析と対立する概念のように見える。なぜなら精神分析は、人間理解の根底にセクシュアリティを置いているからである。この大きな対立を、どのように理解するかを、アセクシュアリティに関する研究を概観したうえで、精神分析におけるセクシュアリティの再検討を行いながら考察した。その結果、セクシュアリティ概念とその種々の道行きの一つとしてアセクシュアリティを位置付ける可能性を提案するとともに、アセクシュアリティ／精神分析が突き付けるセクシュアリティを受け入れることの人間にとっての本質的困難を浮き彫りにした。

〈キーワード〉アセクシュアル、精神分析、セクシュアリティ、アイデンティティ

### 1. はじめに

精神分析は、セクシュアリティを理論の根幹に位置づけ、人間の心に関する理解を構築した学問であり、臨床実践である。こうした意味で、近年広く認知されるようになってきた、アセクシュアル／アセクシュアリティという性的アイデンティティはいっけん、精神分析と強力に対立するように思われる。

アセクシュアル／アセクシュアリティという概念は、他者によって、性的欲望や性的興奮を掻き立てられ、その人に強い関心を抱くこととされる「性的惹かれ sexual attraction の欠如」と定義されている (AVEN, 2005)。より日常語に近い表現を採用するならば、「性行為や性的魅力をそれほど重要視しないこと」とも定義されうる (Decker, J., 2015)。

アセクシュアルを自認する人々は、多くの無理解にさらされてきた。「本当は性欲を感じているのにそれを抑えているだけだ」とか、「何度かセックスをすればきっとセックスが好きになるだろう」といった無理解である。専門家たちからの「何らかのトラウマを抱えている」、「愛着に問題がある人たち」、さらには「性嗜好異常」であるという考察も決して珍しいものではなかったし、現在もそうした理解は存在している。そうした無理

解や偏見を作り出した最前列にるのが、精神分析的なバックグラウンドを持った臨床家や専門家であると見なされている可能性も大きい。

本稿では精神分析の観点から、アセクシュアリティについて検討することを目的とする。その際、アセクシュアルが病理か否かについて検討するのではなく、そうしたセクシュアリティのあり方を、精神分析理論の中にかに位置づけうるかということに関心を置く。

## 2. 精神医学的観点から見たアセクシュアリティ概念

アセクシュアルの人口統計学的な研究において、英国での調査によると成人人口の約0.4%～1%が誰にも性的魅力を感じておらず、ニュージーランドの高校生の調査では、2%近くの高校生が、フィンランド女性の3.3%が同様の結果を示したという調査がある (Brotto, L. & Yule, M., 2017)。Bogaert, F. (2004) によると、英国の16歳から59歳を対象とした調査では1.1%が性的惹かれを誰にも感じたことがないと回答しており、アメリカに住む15歳から44歳を対象に実施された2002年の調査では、女性の0.8%、男性の0.7%が性的惹かれについて「わからない」と回答している (Poston, L & Baumle, K., 2010)。

アセクシュアルはかつては、性的欲望の障害や性的機能不全として病理化されていたが (Scherrer, S., 2008)、端的に言って、現在、アセクシュアルを医学的な観点にはめ込むことはできないと考えられている。彼ら／彼女らはいかなる性的な機能不全、性機能障害としてもとらえられない。例えば、アセクシュアルの女性とそうではない女性との間で、性的覚醒 (arousal)、性的刺激に対する性器の反応に相違は見られなかった (Brotto, L & Yule, M., 2011)。実際、アセクシュアルと自認する3436人に対する調査においては、一定程度の人は妥協的にであれセックスをすることが可能であるし、セックスを楽しむことができる人もいる (Decker L., 2019)。

性的関心/興奮障害については、診断基準の一部に性欲の欠如があるが、最大の違いは、性的関心/興奮障害はこの症状によって苦痛を感じているが、アセクシュアルではそうではないという点であり、実際、除外診断の基準にアセクシュアリティが含まれている。性的欲望低下障害 HSDD<sup>1</sup> の診断を持つ人は、アセクシュアルな人よりも、有意にパートナーを持っており、キスやペッティングなどの性的行為を行っていたという調査結果もある。(Brotto et al., 2015)。

アセクシュアルを性嗜好異常障害ではないかと考える人もいる。性的興奮をもたらす対象が人間ではないという風に理解すれば重なりが見いだせると考える人もいるかもしれないが、性嗜好異常障害では人に性的関心を向けられない場合は非常にまれであり、また

---

<sup>1</sup> 性的欲望低下障害 Hypoactive Sexual Desire Disorder, HSDD は精神疾患の診断・統計マニュアル第4版 (DSM-IV) における診断名であり、DSM-Vでは男性の性的欲望低下障害 Male Hypoactive Sexual Desire Disorder と、女性の性的関心/興奮障害 Female Sexual Interest/Arousal Disorder に変更されている。

この診断を受ける患者は圧倒的に男性のほうが多い。一方でアセクシュアルは女性の比率が多いことから、両者は異なる一群であると考えられる (Bogaert, F. 2006)

以上のことから、アセクシュアルであることは、身体的な性機能異常でも、性的機能の低下でもなく、また性的欲望、性的興奮の障害でも、性嗜好の異常でもなく、主観的な性的関心や興味を持たず、主観的な興奮を体験せず、性的パートナーを持つことに積極的でない人々であることが分かる。

### 3. アセクシュアルにおける恋愛、性的空想、親密さ

性的な関心や興味、主観的な興奮や欲望を感じないのであれば、彼らのパートナーシップはどのようなものになるのだろうか。アセクシュアルな人々の対人関係や恋愛関係、性的態度や空想など、性行動や性に関する心理的プロセスは特徴的なものであることが示唆されている (Oliveira, L. et al., 2021)。Brotto et al., (2010) は、性的魅力と恋愛魅力の発達は独立したプロセスであることを示唆しており、アセクシュアルであることとは別に、恋愛指向は、恋愛経験を抱く相手の性別に応じて様々に分類されている (例、ヘテロロマンティック、パンロマンティックなど)。

もっとも新しい日本における調査では、性的指向と恋愛指向との関係について以下のような結果が示されている。1685名のアセクシュアル当事者に対する調査において、アロマンティック×アセクシュアルと回答した人が37.4%、ロマンティック×アセクシュアルと回答した人が10.4%であった。また、パートナーを望むかという質問に対して、一人を望むと回答した人の割合は49.6%であった (Aro/Ace 調査, 2020)。

van Houdenhove. et al (2015) が行った9名のアセクシュアル女性に対する質的調査では、性的関係と同等の親密さをセックス抜きで持つということを望んでいるといった語りや、好奇心から性的関係を持った経験がある一方で、性行為への嫌悪感や、興味を持たないといった語りも得られており、パートナーのために性行為を行っているという場合も抽出されていた。

性的空想についてはどうだろうか。自慰行為や性行為に際してのアセクシュアルの人々の体験や空想は、多くの場合、特定の対象を思い浮かべておらず、緊張の解放といった感覚を動機としており、ときに「配管の掃除」のようなものとして描写されていた (Brotto et al., 2010; Prause, N. & Graham, A., 2007; Scherrer, S., 2008)。

では親密さについてはどうだろうか。27名のアセクシュアル者に日記の執筆を依頼し、その内容を分析した Dawson, M. ら (2016) の研究では、親密な関係性を友人との間で体験している人が多く、その際に一般的にはセクシュアルに見えるような身体的な親密さがセクシュアルではない意味づけで用いられていた。しかし肉体的、精神的な親密さを性的な意味づけなしに達成するために、アセクシュアルな人々は絶えず他者との関係性や距離感に注目し、言語的、非言語的な交渉や調整を行っていた。Dawson, M. らは、そう

した調整はけっしてアセクシュアルにのみ特有のものではなく、非アセクシュアルの人にも体験しうるものであると述べてもいる。

アセクシュアルの人々の親密な関係性に関する特徴は、対人関係の問題としても検討されており、彼ら／彼女らが、社会的な関係にしり込みしており引込み思案であるという結果もある (Brotto et al., 2010)。さらに、こうした特徴を示した参加者のうち、インタビュー研究にも参加した 15 人のうち 7 人がスキゾイドパーソナリティ障害の特徴を示していたという。また、自閉症スペクトラム障害 ASD との関連についても長年議論されている。アセクシュアル女性の 17% は ASD の診断基準に合致していた (Ingudomnukul, et al., 2007) この割合は、自閉症スペクトラムの基準に合致する人口当たりの割合とも合致している。2021 年の調査では、247 名の ASD の女性を対象とした調査では、36% の人がアセクシュアル・スペクトラムに該当していた (Bush., et al, 2021)。また、Carvalho, J ら (2017) の 87 名のアセクシュアル者のパーソナリティ特徴に関する調査によると、男女ともに外向性が有意に低い結果となっていた。アロマティック・アセクシャルの人は、ロマンティック・アセクシュアルの人より回避的な愛着スタイルを示すという研究もある (Carvalho, A. & Rodrigues, D., 2020)

これらの研究からは、恋愛やパートナーシップ、親密さといったものへの態度は一口にアセクシュアルといっても非常に多様であり、一つの固定的なカテゴリーを形成しえないことが分かるだろう。そして、むしろこれらの研究やその結果は、親密さやパートナーシップ、他者を含む社会との関係性というものの基盤に性愛の存在がある、という前提をいかに社会が保持しているかを浮き彫りにしている。アセクシュアル研究では、このように、社会において性愛が対人関係、なかでも親しい間柄においては当然のように存在している、という多くの人々が暗黙に抱いている感覚を、規範意識として指摘し、これを強制的性愛と呼んで問題提起を行っている (松浦, 2020)。

さて、こうした性愛の持つ強力な力について指摘したのが精神分析である。次に、いよいよ精神分析においてアセクシュアルをどのように理解することが可能かについて検討してみたい。

#### 4. 精神分析におけるアセクシュアルに関する研究

端的に言って、アセクシュアルを対象とした研究はほとんど精神分析、とくに臨床実践としての精神分析においては行われていないと言ってよい。そもそも、セクシュアリティそのものの病理というものは、自己システムの側から見るならばつねにありえず、そのセクシュアリティが正常であるか、異常であるかを決定するのはつねに社会の側である (十川, 2008)。この意味で、臨床精神分析においては、アセクシュアルである状態を病んでいるのであればそれはアセクシュアルとは言えず、アセクシュアルであることによって生じる他者や社会との関係性によって病むのであれば、それは対人関係上の問題とし

て扱われることになる。

この意味で、臨床精神分析において扱われてきた「アセクシュアル」という現象は、アセクシュアルをアイデンティティとしている人ではなく、抑うつや摂食障害の症状の一部として生じるアセクシュアルな状態や (Banks, G., 1997)、虐待体験が幼少期にあり、男性への恐怖心のために深くアセクシュアルな状態にある症例や (Barry, C., 2000)、授乳や更年期などの生理学的なライフサイクルイベント、あるいはパートナーとの関係性によってアセクシュアルな状態にある女性などについてであった (Downey, I., 2009)。しかし、こうした知見の蓄積が翻って、アセクシュアルというアイデンティティを持つ人を、過去のトラウマへの反応であるとか、生殖器を見ることへの嫌悪と結びつけるという偏見を生じさせていた可能性はある。臨床家に自身のアセクシュアリティを信じてもらえず、それを健康上の問題と結びつけられた経験を多くのアセクシュアル者が体験していたという報告もある<sup>2</sup> (Flanagan, S. & Peters, H., 2020)。

これらを踏まえると、被分析者の訴えてきたアセクシュアルにかかわる体験と、アセクシュアルをアイデンティティとする人々とを区別することは重要であろう。実際に、精神分析や精神分析の持っている価値観が、現代のセクシュアリティ理解の変化に後れを取っており、他の人文科学分野と比較しても保守的な異性愛主義をとってきたことを、複数の分析家が指摘している (Chodorow, N., 1992; Mitchell, S., 1981; McCarroll, J., 1999; 北村, 2021)。現在の精神分析的臨床においては、セクシュアリティは、理解するものであっても、それを変化させるものとは考えられていない (Altman, et al., 2004)。

こうした前提のもとで、Freud, S. の理論におけるアセクシュアルの位置づけについて検討してみよう。

### (1) フロイトにとってのアセクシュアリティ

まず、精神分析におけるセクシュアリティという言葉の意味には注意を払う必要がある。Freud, S. にとって、セクシュアリティは、たんに生殖と直接結びつくものを超えている。Freud, S. 自身が、セクシュアリティを「一方の性が他方の性に魅力を感じ、性交や性交へ至る途上にある行為を目指す、という説明ではとても現実を写し取れない」と主張している (Freud, S., 1905)。セクシュアリティは性愛や性交に限定されるものではなく、身体や生物学的本質と結びつきながら、しかしそれを超えて人間を駆動していくものとして複数の次元によって構成されている、およそ人間の活動すべてを覆い尽くす概念と言える (Laplanche, J., 1970)。この意味で、人間にとってセクシュアリティは本能のような自明で自然で調和的なものではなく、危険で、攪乱的なものなのである。

<sup>2</sup> メンタルヘルス分野では、抑うつや、薬物療法の影響、あるいは甲状腺機能障害によって生じる性的欲求・関心の低下が第一に検討されるために、自身のアセクシュアルというアイデンティティへの無理解にさらされる弊害が容易に生じやすい。

さて、Freud, S. は、官能的、性愛的な意図や目的を自覚していない状態、いわばアセクシュアルな状態が人間に存在する、あるいはそのように主張する人々がたくさんいることと、しかしながらアセクシュアルに見えるものの中にもセクシュアルな意味、欲望が存在するという何を何度も主張している。

ここで重要なのは、アセクシュアルであると主観的に体験されていることがらの中にも、セクシュアルな意味や欲求が無意識下に存在しているという主張が、アセクシュアルというアイデンティティの否定を意味しない、という点である。セクシュアリティは愛情深い養育者との関係性を作り、不安をおさめ、他者との情緒的な関係性を築いていく基盤である。そもそもアセクシュアルであることは、冷たい人であるとか愛情を持たない人、であることを意味しない。セクシュアリティにかかわる事象のうち、「他者への性的惹かれを体験しない、性行為を重視しない」ことがアセクシュアルの定義であって、セクシュアリティ全体を否定することは要請されていない。

まず、流動的なエネルギーであるリビドーは最終的に性対象に向けられる大きな一つの流れとしてまとめられる以前には、いくつもの支流に分かれ、とくに幼児期においてはその大部分は性的なこと以外の目的で利用されると考えられている (Freud, S., 1905)。この、リビディナルな衝動は有機体の内部からやってきて、緊張の解消を求めることになり、このエネルギーへの対処に心的装置は迫られることになる (堀川, 2016)。この衝動は可塑的な性質を持っており、満足的手段、目標や対象は代替可能であり、必ずしも異性性愛に向かう訳ではない。なお、乳幼児は性器と性行為にこのリビドーが向く訳では無いという意味で、特に人間の発達初期のリビドーは、本能が本来の目的と機能から逸脱する、倒錯化するプロセスを経る。このことは、幼児は多型倒錯であるという有名なフレーズを生んでいる。

この性行為や官能に向かわないリビドーは社会的感情のためにも利用される。リビドーが解放されない場合に生じる不快感をおさえつけるために、リビドーへの嫌悪や羞恥、道徳心といった感情によって形作られたダムに留め置かれる。このエネルギーは心的加工を受けて、抑圧、あるいは昇華の過程を経て解き放たれる。

さらに対象に向かうリビドーはその対象選択を、幼児期と思春期の二つの時期に分けて行うが、このうち幼児期の対象選択は情愛、崇拜、尊敬の基盤となる。主としてこれは母親に向けられるが、この対象が断念されたのちに、思春期に新たな対象が選択され、官能的な流れが始まる。この二つの流れが重なり合うことが正常な性生活として想定されているが、この官能的な流れは、情愛のこもった感情の方向からは分離されたままにとどまるとされている (Freud, S., 1914)。

さて、こうしたリビドーの流れの中にすでに、アセクシュアルへの道がいくつも見て取れる。いわゆる「正常な性愛」は決して人間の唯一の本性ではなく、あまたあるリビドーの道行きの一つであることが分かるだろう。性対象に向けられないリビドーや、性対象に

向けられたとしてもものに官能的な性対象に向けられる流れに沿わないリビドーの流れはいくらもある。対象へ向けられるリビドーが性的満足以外の目的へと向かえばそれは昇華となりえ、また道徳心や社会性へとつながる可能性をも秘めている。さらに Freud, S. は、欲動と対象との結びつきが必ずしも画一的なものではないと主張しており、こうしたエネルギーは、高次の心の活動によってコントロールすること困難で、特殊なセクシュアリティを持つ者を、「人間文明の発展を個人的に身を持って体験している」と述べている。この意味で、生殖に結びつかない、逸脱した多種多様なセクシュアリティのあり方を人間の発展的現れと見ており、性欲動が様々な目標に方向転換されたり、昇華されたりすることで、文化的な営みを行える力となることは、極めて普遍的なことで、アセクシュアルを含めた多様なあり方をフロイトが想定していたと考えることもできるだろう。

## (2) アセクシュアルという性的アイデンティティについて

アセクシュアルが病理ではないにもかかわらず、問題として浮上するのは、彼ら・彼女らの性的志向性が社会においてアイデンティティとして位置づけられていないという意味で、「不在」の者とされているためである。異性愛を基盤としないアイデンティティは、文化の理解可能性の基準に合致しないがゆえに、その文化の中では発達上の失敗とか、論理的不可能性としてしか現れない (Buttler, J., 1999)。こうしたアイデンティティの形成について、Buttler, J. は、「セックスはいつもすでにジェンダーである」と述べ、生まれる前、あるいは生まれた瞬間から人間は、その身体的特徴によって異性愛的な性別で呼びかけられることによって、男女二元論、そして異性愛的社会規範に参加することを余儀なくされることを指摘している。彼女は同性愛の社会的排除を説明する際に、エディパルな状況において禁止と喪失がともに生じていることに着目し、同性の親への愛の断念として愛する同性の対象に同一化を通して、メランコリーの禁止の残留物として性的な同一性が形作られ、異性愛者が形成されることを論じた。悼むことも悲しむこともできないメランコリーの同性への愛は、それゆえ社会的に排除されることになる。

では、アセクシュアルというアイデンティティの困難はどのように検討可能だろうか。彼ら、彼女らの特徴はこうした同性愛、異性愛のいずれのマトリクスにおいても、官能的性愛への経路以外の道にリビドーが向かうこと、あるいは他者以外を対象に官能的性愛の対象が向かうことである、と先の節では考えられた。この観点から見れば、特に思春期・青年期において顕在化してくるアセクシュアルという性指向性によって、性別同一性、性別役割同一性と強制的性愛ヘゲモニーとの対立があらわになると考えられる。なぜなら自分自身をどのようなジェンダーと位置付けるかにかかわらず<sup>3</sup>、誰であっても性的な対象として指向しないこと、さらに特定のあるいは不特定のパートナーを欲望し、そのパー

<sup>3</sup> 2020年のアロマンティック／アセクシュアル・スペクトラム調査によると、シスジェンダーと回答した人の割合は67.5%であった。

トナーと性的な関係性を形成するという役割同一性を取らないことで、葛藤的な立場に立たされるからである。

いくつかの質的研究において示唆されているのは、思春期初期から、性的関心を当然のように持つ仲間たちからの疎外感を体験し、自分のアイデンティティへの自問が始まり、その過程で性行為を経験したり、性的な関係性を含むパートナーシップを経験する場合を含みつつ、自分のセクシュアリティへの違和感を育てていくという。そしてアセクシュアル・コミュニティと出会い、自分自身のセクシュアリティとしてアセクシュアルを受け入れる、というプロセスが比較的典型的なアセクシュアル・アイデンティティの発達として描かれている (Carrigan, M., 2011; Carrigan, M., Gupta, K., & Morrison, G., 2013; Van Houdenhove et al., 2015)。日本での調査でも、アロマンティック、アセクシュアルを自認した年齢の平均は 23.4 歳であり、20 歳未満と回答した人が 26.8%、20 歳から 24 歳と回答した人は 38.8%であった (Aro/Ace 調査 (2020))。

これらの研究からは、アセクシュアルの排除の構造が浮かび上がる。アセクシュアルというアイデンティティは、それ以外のジェンダーアイデンティティを持つものにとって、自らの性愛的・官能的側面の発達の達成の否定と体験されるのではないだろうか。それゆえに、「セックスを経験したら変わる」、「まだぴったりと来る人に会っていないだけ」といった典型的誤解が生じていると考えられる。これは性愛的・官能的体験が生じること自体がどういった性自認であれ、思春期以降に生じるためであり、その結果として、アセクシュアルは、リビドーの流れの相違としてではなく、情緒・発達の未成熟さや欠落のように理解されてしまっている、と言えるかもしれない。

## 5. セクシュアリティの中に含まれるアセクシュアリティ

ここまで、Freud, S. を基盤として、セクシュアリティの定義について振り返り、さらに、セクシュアリティの流れを追う中で、複数のアセクシュアルへと至る隘路があることを概観した。そもそもセクシュアリティが非常に多義的であるのみならず、人間にとって決して親和的なものではない点は重要である。本能は雷鳴のように衝撃であり、外から降りかかるものであると Winnicott, D.W. は述べているが、こうした性欲動の他者性は、つねに人間にとって自らを脅かし、自分の一部に組み入れていくことに多大な労力を要請する。この困難さは、人を不安にさせ、葛藤させるがゆえに、抑圧され排除された、異なるセクシュアリティの存在に直面せざるを得ない状況が訪れたときに、人々には強烈な反応もたらされる。

このように考えると、アセクシュアルの性的行為への無関心さや興味のなさ、あるいは嫌悪感は、自己の一部として性的関心を組み入れず、性的欲望を他なるものと見なす態度と重なって見えるがために、彼ら彼女らのあり方とスキゾイドとの類似が指摘されている可能性が考えられるかもしれない。さらに、性的関心、性愛的関係への欲望を前

提とした強制的性愛規範によって生じている社会の空気に対して、アセクシュアルがこれらの暗黙の前提に与しないことが、ASDにおける社会性の問題との重なりとして指摘されている可能性もあるだろう。確かに、Freud, S. は対象愛と官能的な流れが合流し、異性の対象へとリビドーが向けられるということを人間の基本的なあり方として描いてはいたが、その流れに至らない多くの支流の存在をつねに書き記している。そして、こうした複数の支流をもったリビドーのありかたそれ自体が、アセクシュアルが恋愛や性行為、パートナーとの関係や自身のジェンダーアイデンティティについては多様なあり方を持つものの、他者への性的惹かれを持たない、という一点においてのみ、まとまりを持っていることを支持する、とも言えるだろう。

さらには、こうしたリビドーの様々な流れと恋着、対象愛といったものを検討することによって、いっけん性愛的な関係性に見えるものの中にも、単なる排出や、ナルシシスティックな追及といったけっして創造的でも生産的でもない、搾取的で、倒錯的な様相を見ることも十分に可能である。例えば、「恋愛」はフロイトにとっては、到達しえない自我理想の代わりをする対象を求める、ナルシシスティックな行為であり、他者を性的に求めているように見えたとしても、その実、求めているのは自己なのである。むしろ、他者を本当に愛するということが一体どういうことなのか、という問題はすべての人間に向けられた問いである。

このように考えるならば、アセクシュアルの性愛は、他者に向けられるという形以外のあらゆる形態をとり、同一化を通じた愛や昇華や、夢や空想の中、創造の中、そして何か新しいものが生まれるかもしれないという期待の中に存在している (Burch, B., 1998) と考えることが可能かもしれない。

## 文献

- Altman, N., Benjamin, J., Jacobs, T., & Wachtel, P. (2004) Is politics the last taboo in psychoanalysis? *Psychoanalytic Perspectives*, 2, 5-39.
- Aro/Ace 調査 (2020) <https://ace-community-survey.jimdosite.com/> (Retrieved on November 25, 2021)
- AVEN Forum. (2005)
- <http://www.asexuality.org/en/topic/9980-masturbating-as-what-do-you-thinkabout-when-masturbating/?p=237288#entry237288>. (Retrieved on November 25, 2021)
- Banks, G. (1997) The Imaginative use of Religious Symbols in Subjective Experiences of Anorexia Nervosa. *Psychoanalytic Review*, 84, 227-236.
- Barry, C. (2000) Reflections on Interactive and Self-Organizing Aspects of Learning in Psychoanalysis. *Annual of Psychoanalysis*, 28, 7-20.
- Bogaert, F. (2004). Asexuality: Prevalence and associated factors in a national probability sample. *Journal of Sex Research*, 41, 279.

- Bogaert, F. (2006) Toward a conceptual understanding of asexuality. *Review of General Psychology*, 10, 241–250.
- Brotto, L. A., Knudson, G., Inskip, J., Rhodes, K., & Erskine, Y. (2010). Asexuality: A mixed-methods approach. *Archives of Sexual Behavior*, 39, 599–618.
- Brotto, L. A., & Yule, M. A. (2011) Physiological and subjective sexual arousal in self-identified asexual women. *Archives of Sexual Behavior*, 40, 699–712.
- Brotto, L. A., Yule, M. A., & Gorzalka, B. B. (2015) Asexuality: An extreme variant of sexual desire disorder? *Journal of Sexual Medicine*, 12, 646–660.
- Brotto, L. & Yule, M. (2017) Asexuality: Sexual orientation, paraphilia, sexual dysfunction, or none of the above? *Archives of sexual Behavior*, 46, 619–627.
- Burch, B. (1998) Lesbian Sexuality/Female Sexuality: Searching for Sexual Subjectivity. *Psychoanalytic Review*, 85, 349–372
- Bush, H., Williams, W. & Mendes, E. (2021) Brief Report: Asexuality and Young Women on the Autism Spectrum. *J Autism Dev Disord* 51, 725–733.
- Buttler, J., (1999) *Gender Trouble: Feminism and the Subversion of Identity*. Routledge. 竹村和子訳 (2018) *ジェンダー・トラブル 新装版 —フェミニズムとアイデンティティの攪乱*. 青土社
- Carrigan, M. (2011). There's more to life than sex? Difference and commonality within the asexual community. *Sexualities*, 14, 462–478.
- Carrigan, M., Gupta, K., & Morrison, T.G. (2013) Asexuality special theme issue editorial. *Psychology and Sexuality*, 4, 111–120.
- Carvalho, J., Lemos, D., Nobre, P. (2017) Psychological Features and Sexual Beliefs Characterizing Self-Labeled Asexual Individuals. *Journal of Sex & Marital Therapy*, 43(6), 517–528.
- Carvalho, A. & Rodrigues, D. (2020) Sexuality, Sexual Behavior, and Relationships of Asexual Individuals: Differences Between Aromantic and Romantic Orientation. Preprint. DOI:10.31234/osf.io/f5hrb
- Chodorow, N. (1992) Heterosexuality as a compromise formation: Reflections of the psychoanalytic theory of sexual development. *Psychoanal. Contemp. Thought*, 15, 267–303.
- Dawson, M., McDonnell, L., Susie Scott, S. (2016) Negotiating the Boundaries of Intimacy: The Personal Lives of Asexual People. *Sociological Review*, 64(2), 349–365.
- Decker, J. (2015) *The invisible sexual orientation: An introduction to Asexuality* 上田 勢子 (2019) *見えない性的指向 アセクシュアルのすべて——誰にも性的魅力を感じない私たちについて*. 明石書房
- Downey, I. (2009) What women want: Psychodynamics of women's sexuality in 2008. *Journal of the American Academy of Psychoanalysis and Dynamic Psychiatry*, 37(2), 253–268.
- Flanagan, K. & Peters, H (2020) Asexual-Identified Adults: Interactions with Health-Care Practitioners.

- Arch Sex Behav. 49(5), 1631-1643.
- Freud, S. (1905) Three Essays on the Theory of Sexuality. S.E.7. Hogarth Press. 渡邊俊之訳 (2009) 性理論のための三篇. フロイト全集 6. 岩波書店, 東京
- Freud, S., (1914) On Narcissism. 立木康介訳 (2010) ナルシズムの導入に向けて フロイト全集 13. 岩波書店, 東京
- 堀川聡司 (2016) 精神分析と昇華—天才論から喪の作業へ— 岩崎学術出版社 東京
- Ingudomnukul, E., Baron-Cohen, S., Wheelwright, S., Knickmeyer, R. (2007) The Relationship between Anorexia and Autism. *Hormones and Behavior*. 51(5), 597-604.
- 北村婦美 (2021) 精神分析における女性性と他者性 *精神分析研究* 65(3), 253-261.
- Laplanche, J. (1970) *Vie et mort en psychoanalyse*. Editions Flammarion. 十川幸司・堀川聡司・佐藤朋子訳 (2018) 精神分析における生と死 金剛出版 東京
- 松浦優 (2020) メランコリーのジェンダーと強制的性愛—アセクシュアルの「抹消」に関する理論的考察 *Gender and Sexuality* 15, 115-137.
- McCarroll, J. (1999) Performativity, Transsexualism, and Benevolent Psychopathology: Some Psychoanalytic Reflections on Postmodernist Views of Sexuality. *Psychoanalytic Dialogues* 9, 505-530.
- Mitchell, S. A. (1981) The Psychoanalytic Treatment of Homosexuality: Some Technical Considerations. *Int. R. Psycho-Anal.* 8, 63-80.
- Oliveira L., Carvalho J., Sarikaya, S., Urkmez A., Salonia A., Ivan Russo G., EAU-YAU Men's Health Working group (2021) Patterns of sexual behavior and psychological processes in asexual persons: a systematic review. *Int J Impot Res.* 33(6), 641-651.
- Prause N & Graham CA (2007) Asexuality: Classification and characterisation. *Archives of Sexual Behaviour*, 36, 341-356.
- Poston, L., & Baumle, K. (2010) Patterns of asexuality in the United States. *Demographic Research*, 23, 509-530.
- Scherrer, S. (2008) Coming to an asexual identity: Negotiating identity, negotiating desire. *Sexualities*, 11, 621-641.
- 十川幸司 (2008) 来るべき精神分析のプログラム 講談社選書メチエ
- van Houdenhove, E., Gijls, L., T'Sjoen, G. & Enzlin, P. (2015) Stories About Asexuality: A Qualitative Study on Asexual Women. *Journal of Sex & Marital Therapy* 41(3)262-81.